

教育GP経過報告 第30号 2011.3.25

1. 自己点検・自己評価委員会での報告

2011年2月23日(水) 15:00~17:00、吉備国際大学7号館711講義室において、第14回自己点検・自己評価委員会が行われました。その中で、横山先生により本教育GPの取組についての報告が行われました。10分の短い時間の報告であったため、主たる目的に沿い、合同演習の実施と体制づくりについて発表されました。

当日の発表資料は以下の通りです。

<発表資料>

大学教育GP:質の高い大学教育推進プログラム(平成20~22年度)

2011.2.23

医療・福祉領域の連携スキル学習プログラム

- 包括ケアを目指した社会福祉・看護・作業療法領域の合同演習の試み -

社会福祉学部 社会福祉学科 横山奈緒枝

推進メンバー:米良重徳・今村俊介・岡崎幸友・加藤博仁・黒宮亜希子・橋本由紀子・平井順
福島知子・保積功一・松原浩一郎・栗田喜勝・笹田洋子・吉田薫・矢山祐希・小林隆司・岩田美幸田島明
子・中角祐治・難波悦子・藪脇健司・尾瀬裕・赤松恵美・池永理恵子・安福真弓

. 本取組の目的とポイント(概括)

目的: 1. 保健・医療・社会福祉領域の専門職者養成において、領域の枠を越えた教育体制(合同

演習)を設定し、連携力の養成を強化する **合同演習**

2. 本取組により実習機関との協働をはかり、学生同士、大学教員、実践現場担当者の
学びのコミュニティ形成をはかる **協働体制**

ポイント:

- (1)教育課程に**対象者を主体**にすえるアプローチを導入する。
- (2)学科を越えた**連携スキルの合同演習の場**を位置づける。
- (3)リアリティのある場面設定(**シチュエーションロールプレイ**)に基づき、連携スキル学習プログラムを活用する。
- (4)大学と実習機関を円滑につなぎ、**実習の教育的効果**をあげる。
- (5)専門領域、他領域との接点を**着眼点トレーニング**の場とする。
- (6)他専門性を認識することから**自己の専門性への理解**を深める。

- (7) 連携の技能を「スキル」として明確化していく。
- (8) 個別にコミュニケーションスキルや連携力向上を目指していけるように養成する（学習ポートフォリオ）。
- (9) 教員・実習機関指導者・学生による学びのコミュニティを形成する。

目的1：合同演習

開催経過：参加学生数と養成側人数

| 年月日(養成側数) | 社会福祉 | 看護 | 作業療法 | 計 |
|---------------|---------|----------------|------|-----------|
| 20年度2/5(18) | 11名 | 4名 | 6名 | 21名：2～3年 |
| 21年度8/5～7(18) | 13名 | 5名 (高等看護学校) | 4名 | 22名：2～3年 |
| 2/4～6(25) | 20名 | 13名 | 23名 | 56名：2～4年 |
| 22年度 8/4(22) | 0名時期合わず | 3名 | 3名 | 6名：3～4年 |
| 10/23(30) | 4名5名 | 23名 | 24名 | 44名：2年 |
| 11/13(26) | | 17名 | 17名 | 46名：2年 |
| 合計(139名) | 53名 | 72名 | 70名 | 学生数合計195名 |

合同演習（キャリア開発）の流れ

平成20～21年度は自由参加であったが、平成22年度より、「**キャリア開発**」授業内での実施(5コマ)となった。1日の集中授業で、1～5限までの5個までの実施である。5コマの流れは以下の通りである。この実施のための学生用テキスト、教員用指導書を刊行した。

- 1 限：オリエンテーション・ミニ講義・グループ分け
- 2 限：基本演習 高齢者への声かけ
- 3 限：基本演習 他職種との連携
- 4 限：応用演習（基本演習を通して）
- 5 限：ディスカッション・発表会

目的2：協働体制

会議経過

| 会議内容 | 平成20年度 | 平成21年度 | 平成22年度 | 計 |
|----------|--------|--------|--------|------------|
| 推進メンバー会議 | 3回 | 6回 | 6回 | 15回 |
| 合同演習会議 | 4回 | 6回 | 7回 | 17回 |
| 事業評価委員会 | 1回 | 1回 | 1回 | 3回 |
| その他関連会議 | 2回 | 7回 | 4回 | 13回 |
| 計 | 10回 | 20回 | 18回 | 48回（延465名） |

* 外部合同演習評価委員 8名(地元4施設)、外部事業評価委員 4名

研修会の位置づけ及び概要と成果

参加者の範囲（FD研修として実施）は、当初は学内教員が主であったが、平成21年度以降、学生や現場の施設職員等の参加も積極的に受け入れるように取り組んだ。

| 経過 | | 日時 | テーマ | 参加者数 |
|------|---------|-------------------------------|---|----------------|
| 20年度 | 第1回 | 平成20年12月3日(水) 10:55~12:25 | 講演:「ソーシャルスキル教育の意義と概要 - 医療・福祉領域における重要性 - 」 | 58名 |
| | 第2回 | 平成21年1月28日(水) 10:55~12:25 | シンポジウム:「実習教育におけるコミュニケーションや連携に関する教育の実情と課題」 | 30名 |
| 21年度 | 第1回 | 平成21年12月17日(木) 13:30~15:00 | 講演:「イギリスにおけるインタープロフェッショナル教育について」 | 48名 |
| | 第2回 | 平成22年3月16日(火) 13:25~14:55 | 講演:「オーストラリアの視察訪問に関する報告」 | 35名 |
| 22年度 | 第1回 | 平成22年9月29日(水) 11:15~12:45 | シンポジウム:「保健医療福祉領域における連携力の養成課題」 | 72名 |
| | 第2回 | 平成22年12月22日(水) 10:40~16:30 | 講演、成果報告、シンポジウム:「連携の今とこれからを語り合う~地域・施設・大学から~」 | 午前67名 午後47名 |
| 計 | 6回(年2回) | | 講演、成果報告、シンポジウムなどの実施 | 延310名 |

連携教育先進国海外視察の概要

| 項目 | イギリス | オーストラリア | カナダ |
|-------|----------------------------|------------------------------|------------------|
| 視察担当者 | 園部 信大(外部協力者、社会福祉法人みどり園副園長) | 田中 共子(演習指導者、岡山大学社会文化科学研究科教授) | 黒宮亜希子(推進メンバー) |
| 期間 | 平成21年11月7~14日 | 平成22年2月27~3月3日 | 平成22年11月14~20日 |
| 視察先 | CAIPE、ノッティンガム大学他 | モナッシュ大学 | マックマスター大学、トロント大学 |

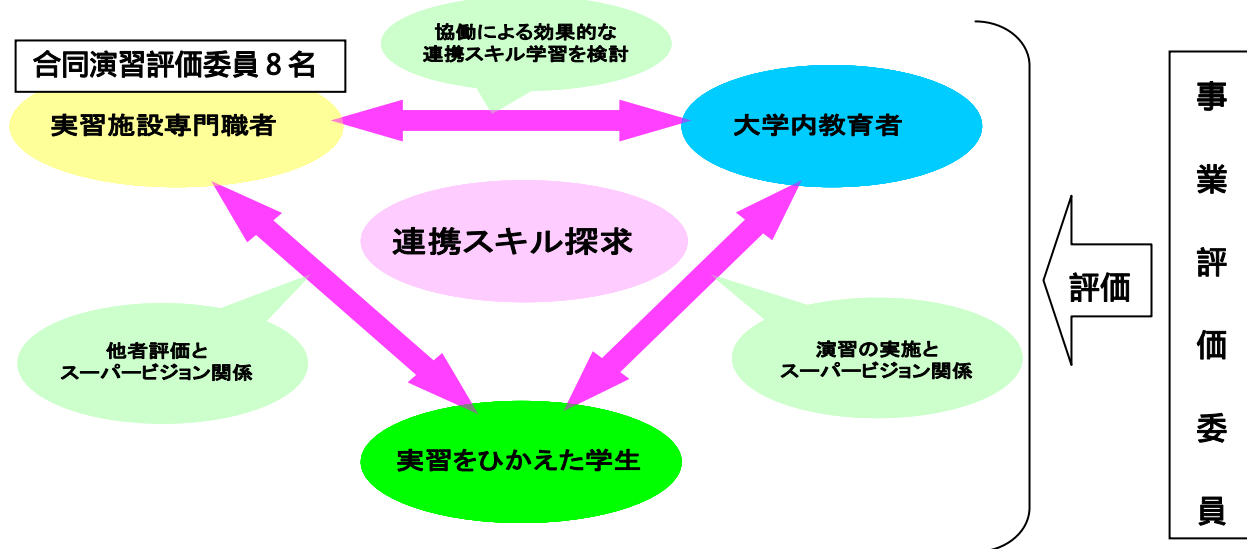
成果の公表

| 発表等の名称 | 発表学会の名称・発表年月 |
|--|------------------------------------|
| 1. 包括ケアを目指した社会福祉・看護・作業療法領域の合同演習の試み | 平成20年度合同フォーラム平成21年1月12日~13日 |
| 2. 医療・福祉領域の連携スキル学習プログラム 社会福祉学部・保健科学部の合同演習の試み | 第4回高梁学園学術研究コンファレンス平成21年3月7日~8日 |
| 3. 老人保健施設における多職種間の連携に関する探索的研究 | 第24回日本保健医療行動科学学会学術大会平成21年6月27日~28日 |
| 4. 老人保健施設における多職種間の連携に関する探索的研究(2) - 事例にみる連携スキルの機能的運用 - | 日本健康心理学会第22回大会平成21年9月7日~8日 |
| 5. 多職種間連携における“流れ感”の意味するもの - 老健施設での協働の実状をめぐる認知 - | 日本質的心理学会第6回大会平成21年9月12日~13日 |
| 6. 社会福祉、看護、作業療法の連携のための合同演習の試行と課題 - 専門性の相互理解に焦点をあてて - | 第2回日本保健医療福祉連携教育学会平成21年10月11日 |
| 7. 老人保健施設における保健・医療・社会福祉専門職の連携力の養成 | SST普及協会第14回学術集会平成21年12月11日 |
| 8. Social skills learning for elderly care professionals | 第8回アジア社会心理学会平成21年12月11日 |

| | |
|--|--|
| in inter-professional work situation | 日～14日 |
| 9. 包括ケアを目指した社会福祉・看護・作業療法領域の合同演習の試み | 平成21年度合同フォーラム平成22年1月8日 |
| 10. 医療コミュニケーションの多様性：「医療・福祉領域における連携力養成 -合同演習の試み-」 | 「双方向型医療コミュニケーション教育の展開」シンポジウム平成22年2月20日 |
| 11. デジタルポートフォリオ活用による演習・実習指導連携 | 第5回高梁学園学術研究コンファレンス平成22年3月6日 |
| 12. 医療・福祉専門職者の連携力養成の試み - 連携スキル学習プログラムを用いた合同演習 - | 日本リハビリテーション連携科学学会シンポジウム平成22年3月20～21日 |
| 13. 多職種間連携スキル学習プログラムの効果 - 保健医療福祉領域の学生における合同演習前後の変化 - | 第25回日本保健医療行動科学学会学術大会平成22年6月12日～13日 |
| 14. 高齢者支援に関わる専門職の連携力向上を目的とした教育プログラム～シチュエーションロールプレイを用いた合同演習の効果～ | 第52回日本老年社会科学大会平成22年6月17日～18日 |
| 15. 模擬体験型学習による連携スキルの習得 - 保健医療福祉領域における合同演習の基本を学ぶセッションから - | 第3回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会平成22年8月11日～12日 |
| 16. Cognitions of occupational therapy, nursing, and social welfare students after completing a training program to developing cooperation | アジア健康心理学会第4回国際会議平成22年8月27日～31日 |
| 17. デジタルポートフォリオ活用による医療・福祉領域連携演習サポート | 平成22年度教育改革ICT戦略大会平成22年9月1日～3日 |
| 18. 医療福祉三領域の連携のためのソーシャルスキル学習 - 全人的ケアのための利用者との対話と専門職間の連絡調整 - | SST普及協会第15回学術集会平成22年11月5日～6日 |
| 19. 体験型連携教育の効果と課題 - カリキュラム化された合同演習授業から - (教育 GP の成果と課題) | 第6回高梁学園学術研究コンファレンス平成22年3月6日～7日 |
| 20. 保健医療福祉専門職学生による連携養成教育の効果 - 連携スキル学習プログラムの体系化とその影響 - | 第12回日本リハビリテーション連携科学学会大会平成22年3月12日～13日 |

・取組体制 - 本取組範囲の核になる3者の相互関係のポイント -

本取組の柱である合同演習の3者関係は以下の通りであり、そのつながり強化を進めた。



【実習施設専門職者 大学内教育者】

- ・高梁市内高齢者関係施設 4 ヶ所、各施設 2 名の計 8 名の専門職者が合同演習評価委員として、学内教育者とともに合同演習内容の検討に参画する。
- ・合同演習に出席し、専門職者と教育者が協働で演習授業に取組み、その進行や内容についての反省会、検討に相互が参画し、内容の修整に協力し合う。
- ・合同演習手法に関する感想をシートにて双方が提出する。
- ・教育 GP 研修会に各自が参加し、学び合いながら適宜、内容に関する助言を提供する。
- ・専門職者は、教育者の連携に関する聞き取り調査へ協力し、実践実状を共有する。

【実習をひかえた学生 実習施設専門職者】

- ・学生は合同演習へ参加し、専門職者からのアドバイスから学び、相互に質疑応答し合う。
- ・専門職者による合同演習での演技例から学び、実践者としての留意点の示唆を受ける。
- ・専門職者は、アドバイス DVD の作成へ協力し、演技例やアドバイスを具体的に示す。
- ・双方が、合同演習に関する各種シートに記述し、提出し、お互いの感想から学び合う。

【大学内教育者 実習をひかえた学生】

- ・教育者は、合同演習前に演習授業内容のアナウンス、解説を行ない、宿題を指示する。
- ・教育者は合同演習において、グループのファシリテータを務め、アドバイスを実施する。
- ・演習終了後、学生は演習授業内容を振り返り、教育者はポートフォリオの活用を促す。
- ・学生は教育者のアドバイスから学び、質疑応答し合い、相互に実習の話にもつなげる。
- ・双方で実習関連科目においても、合同演習での自己評価や状況をつなげて学びを深める。

・まとめのポイント

- (1) 対象者主体を意識した合同演習をカリキュラムに導入して実現された。
- (2) 合同演習は細かな内容は繰り返し検討され、学内教員・実践者の課題共有の中で内容の改善が進められた。プログラムの一定の手法と内容は確定され、テキスト化された。

- (3) 実習へ向けた事前の連携を学ぶ体験型学習が設定され、具体的学びの流れの整備は進んだ。
- (4) 学生、教員、地元施設実践者との学びの場の設定と、その中での学びの充実は推進された。
- (5) 演習、研修会等へ、多くの学生の協力、現場実践者である卒業生にもご協力をいただいた。

【ホームページのご案内】

本学教育 GP では、様々な活動状況の情報開示と、また意見交換の拡充の場としてホームページの開設を平成 21 年 1 月 9 日に行なっております。今回、報告いたしました、会議の経過に沿った記録や連携教育実施状況などを詳細に開示し、具体的な内容と経過を理解できるような内容にするよう心がけております(平成 22 年度アクセス 1,974 件)。今後、「研修会」「英語翻訳版」の内容も挿入予定ですので、ご覧いただければ幸いです。

2. 長崎国際大学からの視察

2011 年 2 月 28 日(月) 15:30~17:30、長崎国際大学 就業力 GP から 3 名の方<松永一臣氏(教育改革推進室係長(広報兼務)、脇野幸太郎氏(事務局 GP 専従)、林 俊介氏(健康管理学部健康栄養学科 講師)>が、教育 GP 推進室を視察訪問されました。本教育 GP では、推進メンバーから横山先生と今村先生が対応されました。ポートフォリオの運用状況やその工夫、他学科との連携方法、ロールプレイのやり方や設定方法、外部評価の方法など、様々な質問が寄せられ、本教育 GP からはこれまでの状況や成果、残された課題などについての回答を行ないました。具体的な質問項目などは、以下の通りです。



◇ ポートフォリオの運用状況について。それに関する工夫は？ 実施したうえで残った課題は？
<回答>

- ・ 紙媒体とデジタルを併用。
- ・ 個別の学びを強化するというメリットはある。
- ・ ランニングコストがかかる。
- ・ 経験のないツールであるため、学生の主体的なアクセスを促し、モチベーションを高めることが必要。
- ・ 運用前に事前の場づくり、継続できる方法・仕組みを検討しておくべきであった。

◇ 他学科との連携方法、学内共同体制の強化方法について。イニシアチブの取り方。

- ・ 専門領域・分野の違いは大きい。
- ・ 最終年度に管理職が GP 推進メンバーに入ったことは大きい。
- ・ 情報共有、確認の仕方が非常に難しい。
- ・ 関わる人数が増えるほど、タイムラグが大きくなってしまう。
- ・ カリキュラムが縦割りであるため、共通の場を設定するのが困難である。

◇ 予算の運用方法について。

- ・ 文科省と大学で費目の扱いが異なっており、煩雑な手続きが多くなる。
- ・ 推進メンバーに予算状況を把握してもらうため、学科ごとに支出状況を示す書類の回覧を行なっている。



◇ ロールプレイのやり方、設定の仕方について。

- ・ ロールプレイの経験が乏しく、最初は難しい部分もあるが、繰り返すことで学生にも慣れが出てくる。
- ・ 実践者の演技例を盛り込み、学生の気づき・学びを促している。
- ・ 演習冒頭と終了間際には、学生の変化は大きい。
- ・ 演習で他学科の学生と関わり、役割分担を行なうこと自体が、チームでの協働を学ぶ機会となっている。
- ・ 教員の側が、グループワークという手法自体への理解をしておくこと、周知させることが重要。

◇ 外部評価の方法について。

- ・ 初年度には作成していなかったが、プログラムの進捗状況进行评估し、得点化するために、2年目からは評価表を作成している。
- ・ 評価表は、外部評価委員だけでなく、学内の管理職や推進メンバーなどにも記入してもらい、多面的な評価となるようにしている。

◇ 現場との連携をどのように継続していくのか？

- ・ 各学科別に実習センターがあるので、実習を通じて関係を保っていくことになるが、関わる教員が異なるため、この点は課題である。
- ・ 横のつながりがあるのが望ましい。

◇ GP を行なう上で一番の課題になるものは？

- ・ 事前の詳細なプログラム設計（やってみないと分からない部分も多いが）。
- ・ 修正が生じた際の、柔軟で臨機応変な対応。
- ・ プログラムの効果測定や評価が非常に重要。
- ・ どうやって費用をかけずに、継続していくか。
- ・ 連携に関連する学会でも話題になるのは連携スキルプログラムの効果についてであり、本当に評価できるのは卒業して、現場で働くようになってからではないかということで、卒業生へのアプローチについては、今後の課題。
- ・ 学生の反応を極力残しておくべき。



3. 第7回順正学園学術コンファレンスへの参加、発表

2011年3月5日(土)、6日(日)の両日にわたり、第7回順正学園学術交流コンファレンスが、九州保健福祉大学で開催されました。その教育部門で、推進メンバーの横山先生が、「体験型連携教育の効果と課題ーカリキュラム化された合同演習授業からー(教育 GP の成果と課題)」と題し、本教育 GP での取組について発表を行ないました。内容は本年度10月と11月の合同演習結果に焦点をあてたもので、学生が事前事後に記載するアセスメント結果から、前後の変化を比較検討した内容でした。この発表については、教育部門高梁キャンパス賞を受賞することができました。

なお、発表要旨・ポスターなどの詳細については、「学会報告」内容をご覧ください。

4. 第12回日本リハビリテーション連携科学学会大会での発表・参加

2011年3月12日(土)～13日(日)に滋賀県大津市のピアザ淡海において、第12回日本リハビリテーション連携科学学会大会が開催され、本教育 GP から作業療法学科の藪脇がポスター発表を行い、また、学会参加を通じて情報収集を行いました。

日本リハビリテーション連携科学学会は、リハビリテーション諸科学の有機的連携、現場の実践に即した研究・討議、リハビリテーション分野のネットワーク、トータルリハビリテーションを目指し、医学、教育学、心理学、社会福祉学、工学など関連諸科学の研究者や実践家の共通の広場として機能する学会であるため、このような大会で連携教育に関する情報交換を行うことは非常に有意義であると思われます。



本大会は滋賀県立リハビリテーションセンター所長の藤原誠先生が大会長でしたが、大変残念なことに大会前にご逝去されました。謹んでお悔やみを申し上げます。今回の大会テーマは、「コミュニティの創成・継承・展開ー響きあい、繋がるこころ」であり、地域の人々が安心して豊かに暮らすための方策や連携方法を検討する多くのプログラムが実施されました。

また、一般演題では、「保健医療福祉専門職学生における連携養成教育の効果ー連携スキル学習プログラムの体系化とその影響」と題し、平成20・21年度に実施した合同演習の効果についてポスター発表を行いました。質疑応答では、「臨床実習後のフォローはしていないのか」「必修化はどのような授業内で行っているのか」などの質問を受け、全体的に聴衆は、演習そのものの効果よりも、4年間の教育システムの中で学習プログラムをどのように運用していくかに高い関心をもっているようでした。

今回の大会参加を通して、教育 GP 終了後の連携スキル学習プログラムの推進に役立つ多くの情報交換が可能になりましたが、各職種の専門教育と有機的に結びつける難しさをあらためて実感する機会となりました。



会場付近からの琵琶湖の眺望

教育 GP 採択期間終了に伴う推進室の閉室について（ご挨拶）

本取組は3月31日をもって、採択期間を終えることとなり、推進室も合わせて閉室となります。ご協力をいただきました多くの施設実践者の皆様、他大学の諸先生に厚く御礼申し上げます。

本学のプログラムは多学科で体験型演習を行なう内容です。未だに初回の演習時、“何が始まるのだろうか”“何をやらされるのだろうか”と不安そうだった学生たちの様子を忘れることができません。しかし、その後の演習でも同様ですが、こちらの心配をよそに、実際にロールプレイが始まると学生たちは活き活きと発語し動き、観察し、相互にコミュニケーションを進めてくれます。本取組を通して、学びの場の設定の工夫によって、学生各自に備わっている「相互理解力」と「自分の専門性を捉える力」を高められるということを教えてもらいました。取組体制も内容も不明確だった当初より、自由参加の形態にも関わらず、105名の学生たちがこのプログラムに出席し、その内容検討と確定までを支えてくれました。プログラム受講生の皆さん、ありがとうございました。

当初の予定に沿い、本プログラムは今年度(平成22年度)からカリキュラム内における授業の設定となり、90名が履修しました。今後も、内容の改善と継続的实施が問われることとなるでしょう。連携の充実は、多忙を極める日常の中で、他のシステムや他の手法等に則っている同士が心を開き、協働作業を実施できるかどうかにかかっているように思います。そこには各自に新たな思考が求められ、また役割の再分担や気持ちのズレの克服も必要となり、主体的なエネルギーと時間を多大に割くことが不可欠になります。教育 GP に取組むこと自体も連携が求められましたので、これは簡単なことではないと実感しています。しかし、多職種がつながり合い、1人ひとりを尊重し力を発揮していただくという姿勢とアプローチは対象者のより良い状態を築くとともに、働きかける側の技能を練磨し意義深いものに変えていく源でもあると信じたいと思います。この取組が今後の本学の教育実践の1つの糧になりますよう祈念いたします。最後になりましたが、学内教員の皆様、推進室職員の皆様、お疲れ様でした。不十分な実務遂行にお力添えいただき、深く感謝申し上げます。

なお、本教育 GP ホームページは今後も残っておりますので、ご覧いただきご参考にしていただければ幸いです。

教育 GP 実務担当 横山奈緒枝